

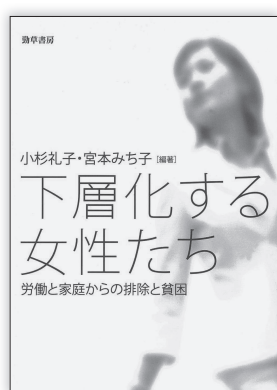
書評

小杉礼子・宮本みち子編著

『下層化する女性たち： 労働と家庭からの排除と貧困』

(勁草書店／2015年)

宮坂 順子



本書は、日本学術会議社会学委員会「社会変動と若者問題分科会」と独立行政法人労働政策研究・研修機構共催のシンポジウム「労働政策フォーラム」の第5回（2013年）と第6回（2014年）の登壇者たちにより書き下ろされた。

このシンポジウムは「若者の自立」をメインテーマに、2009年より2014年まで毎年開催された。第5回と第6回は、「若年女性の社会的排除と貧困」と題して、それまで議論の中心に取り上げられなかった「女性」に焦点をあてている。

「女性が輝ける社会！」——女性の社会進出や雇用を促進し、日本経済の活性化をめざすという現政権のスローガンが打ち出されて久しいが、その追い風を実感している女性たちはどれだけいるだろうか。むしろ、ますます悪化する現実にはだちやあきらめの念を抱いている女性たちの方が多いのではないだろうか。

本書は、ポスト工業化社会の中で、若年女性のおかれている困難な状況について、研究者や支援事業にかかわる活動家たちが、それぞれの視点から鋭く分析し、様々な課題を投げかけている。これまで経済的困窮の側面から取り上げられることが多かった女性の貧困問題だが、本書は、女性たちを取り巻く様々な排除の諸相やそれらの相互作用についても余すところなく明らかにしている。男性非正規就労者の貧困の陰で、社会問題視されずにきた若年女性の貧困の全容を俯瞰することができる一冊である。

本書は、序章に始まり、第Ⅰ部「労働と家庭からの排除の現状と課題」（第1章～3章、コラム1）、第Ⅱ部「貧困・下層化する女性」（4章、5章、コラム2）、第Ⅲ部「支援の現場から」（第6～8章、コラム3）の三部構成となっている。以下では、第Ⅰ部を主に、各章の内容にふれてみたい。

まず序論「課題の設定」で宮本みち子は、低賃金不安定就労の若い女性たちが増加し、生活基盤が脆弱となっている現状を、ポスト工業化社会特有の現象と位置づけ、広い視野でこの問題に立ち向かう必要があると指摘する。さらに、この女性たちの状況は、「労働

と家庭からの排除」であり、ジェンダーが密接にかかわっており、「社会的排除」の文脈からとらえる必要性があると論じている。

第I部では、社会学や女性学の研究者たちが、若年女性労働の現状と課題について理論的に整理し検討している。

第1章で山田昌弘は、「女性労働の家族依存モデルの限界」と題し、日本における女性労働の位置づけを曖昧にした要因について解き明かしている。戦後の「女性労働の家族依存モデル」（女性が家族に包摂されることを前提で組み立てられたモデル）では、女性の経済的自立は想定外であった。しかし1990年代後半からの「ニューエコノミー」の浸透による労働環境の悪化で、包摂する家族が弱体化し、そこから排除される若年女性たちが増加した。さらに女性が「労働依存モデル」（収入を得て自立するというモデル）へ移行しようとしても、労働環境の悪化の中では困難を極める。「若年女性の貧困問題対策には、労働、親の状況、配偶者候補の男性の状況まで考慮した社会政策の展開が必要」と指摘する。

第2章では、江原由美子は「見えにくい女性の貧困——非正規問題とジェンダー」と題し、「クレーム申し立て」という社会学の枠組みを用いて興味深い論を展開している。女性の貧困を社会問題として広く認知させるためには「クレーム申し立て」が必要である。しかし「女性労働の家族依存モデル」では、そもそも女性の非正規就労の現状はクレーム申し立てするような事象とはならない。一方「女性の経済的自立モデル」からのクレーム申し立てはどうかといえ、女性労働の家族依存モデルの強固な現実の前に、モデル自体の妥当性さえも曖昧となってしまう。結局、「女性の貧困」を生み出す「若年女性の非正規労働化」と「若年女性の有配偶率の低下」という2つの社会的要因のうち、いずれか一方しか「問題化できない論理構造」があり、女性の状況は、個人の「ライフスタイルの選択の問題」へと落とし込まれてしまうと指摘する。この状況を変えるには、社会構造次元で「性別役割分業が、非正規労働者の貧困化問題を強化・正当化しているという認識」の確立が不可欠と結論づけている。

第3章「ままならない女性・身体——働くのが怖い、産むのが怖い、その内部へ」で金井淑子は、女性たちの「労働と産むこととの間の根源的矛盾」に起因する「ジレンマに満ちた状況」に言及している。現政権の経済活性化政策はキャリア女性の活用を押し進めるが、「家族依存モデル」が支配的な社会構造の矛盾の中で、女性間の格差はますます拡大する。そこにカップル関係も相乗されると、さらに所得格差が広がり、次世代の再生産コストにも格差が生じ、格差社会が固定化すると指摘する。一方、少子化対策では、女性に産むことへのプレッシャーがかけられる。男性と比べて、メンタルヘルス系の問題を抱えるのは女性が圧倒的に多く、下層女性のみならず、「勝ち組」や「バリキャリ」女性たちも含まれ、多くの女性たちが、今の社会に不安や生き難さを抱えていると指摘する。さらに女性自身が感じている「怖さ」には、経済活性化のための「女性の戦力化への深い違和感が潜在」しており、「フェミニズムが描くオルタナティブな社会の構想は、このグローバル資本主義の毛穴に巣くう『かすかな抵抗の声』をどの深さにおいて聞き取ること

ができるかにかかっている」と論じる。

第Ⅱ部では、究極の貧困状態であるホームレス問題から、女性の貧困に迫っている。

第4章で丸山里美は、ホームレスに女性が少ない理由として、女性の貧困が世帯の中に隠されていること、もともと女性は低賃金であるため生活保護などの福祉制度を利用しやすいことをあげている。しかし広い意味でのホームレス（野宿者だけではなく家がない状態の人）を見ると、世帯内の不平等な関係やDVから逃れてネットカフェや施設に入るなど、女性の「隠れたホームレス」になりやすい実態を明らかにしている。家族に包摂されていても、「女性労働の家族依存モデル」から派生する負の連鎖が、女性のホームレス化を助長していることがわかる。第5章の山口恵子も、女性ホームレスの人生には「さまざまな困難が折り重なっている」と指摘する。多くが家族の問題を抱えており（家族福祉からの排除）、経済的自立を目指そうにも不安定な労働にしか就けず（企業福祉からの排除）、流動的な性産業で働く女性も多い。さらにセイフティネットの粗い網の目からもこぼれ落ちてしまう（公的福祉からの排除）。若者の貧困を自己責任や心の問題と片付けず、「社会構造と制度の不備や市場・国家権力との関係に批判的なまなざしを向けて行くべきだ」と述べる。

第Ⅲ部は、困難を抱えた女性たちを支援する現場の取り組みを紹介している。第6章では電話相談窓口「よりそいホットライン」の遠藤智子が、若年女性の「貧困と社会的排除」は、性暴力被害と密接な関係にあることを明らかにしている。孤立している被害女性をいかに支援につなげるかが女性の「下層化」を食い止める鍵だと指摘する。第7章では、生活困難な人たちの就労・自立支援事業を展開する「パーソナルサポート事業」に関わる白水崇真子が、下層化する若年女性には、身近に自立した大人の女性になるためのロールモデルがおらず、低学歴で労働環境も悪く、時給の高い性産業や援助交際に向かうケースが後を絶たない現状を明らかにしている。女性たちに、男性同様に安定的に働き続けられる労働環境と、職業訓練や高等教育を受けるための支援が不可欠だと指摘する。第8章では小園弥生が、横浜市男女共同参画センターで実施する、生きづらさを抱える女性たちへの支援事業「ガールズ編しごと準備講座」を紹介している。受講者は、孤立していた自分自身を見つめ直し、情報や人につながるきっかけを得て、ゆっくりではあるが自立に向け歩みだすという、人につながる「場づくり」による支援の可能性を示している。

本書では、研究者や支援事業にかかわる活動家たちが競合して、見えにくい女性の貧困問題を様々な角度から可視化し、迫力ある提言を行っている。貧困状態にある女性たちが抱える困難な状況は、私たち女性にとって自分たちの問題であると同時に、男性たちの問題でもある。本書を通して私たちは、社会に構築されている強固な矛盾を再認識することができる。この問題の解決には、各章で異口同音に指摘されているように「社会構造次元での問題の認識と対処」が不可欠である。